

「目下の懸念事項ですが」

額の汗をハンカチで拭いながらマイルズ氏が切り出す。

「我々は…もうしばしの間ここにどまらざるを得ないということですよ」

四方から溜息混じりの落胆の音がこだまする。

「あなたは先程もそうおっしゃいましたがねマイルズさん」

山高帽の男が反駁する。

「私の時計が正しけりや我々はもう既に4日もこんな所に閉じ込められてるんですぜ」

「ええ…ええ、全く持つてその通りでございます。大変申し訳ないことですが…未だ復旧の目途は立っておりませんので…、どうか今しばしのご辛抱を」

山高帽の男はまだ何か言いたげな様子だったが、やがてかぶりを振つて自らの陣取つていたところへと戻つていった。

とはいえ仕方あるまい。山高帽の不満も分からぬではないが、有史以来、今ほどどうしようも無い時は無いのだから。

外から咆哮が聞こえた。

「それにしてもお互いに難儀なことですわね」

レイチェルと名乗った女ジャーナリストがころころ笑いながら言った。

「こんな蝙蝠のねぐらみたいな所に丸々日…、インドでマハラジャのスキヤンダルを追っかけた時だつてこんな気の滅入る思いはしませんでしたわ」

彼女の天性の素質たるおしゃべりさ加減は最初こそ、元来が寡黙な質の私を少し悩ませはしたが、今では一服の清涼剤めいた役割を果たしている。

「それはそうとマンチェスターがすっかりゴーストタウンになつてしまったのはご存知？ 栄枯盛衰は世の理ですけどれどもなにもこんな形でねえ」

彼女の情報筋がどれくらい確かな物かshれないが、もし真実ならば、イギリスは大半の機能を失つたことになるだろう。ぞつとしない話だ。

鬱屈した感情が顔に出ているのだろうか、彼女は、ウーンでは人類は望ましい戦果を挙げた事、中国が近々、大々的に軍を出動させる事などの前向きな話題に切り替えた。

「まあなんのかんの言われていますが」彼女は努めて明るい調子を崩すまいとして続ける。

「これまでも人間は何度も絶滅の危機を乗り越えてきたんですもの、今度だつて…」

彼女の言葉は断続的な地響きによって遮られた。

既に悲鳴をあげるものはいない。泣き出す子供もいない。ただ、息を殺し、潜めるのみ。それが我々に出来る最善の行いだつた。

無限にも思える時間だつたが実際には一分程度の出来事だつたのだろう。

地響きが止んだ時皆は心底くたびれきつた様子だつた。「ああ！」レイチェルは十分に押し殺された声で叫んだ。

「私、こうなつてからつくづく思いますけど狩りつてこいういものなんでしょうね。とことんまで獲物を追い詰めて、完全に弱りきつた所をずどん！上の連中も分かつててやつてるのかしら」

相変わらずの長口舌だったが、不安と動揺を掻き消す為のものである事は明白だった。

彼女ですら余裕を失いかけている。その事実が私をまた、暗澹たる思いにさせた。

やがて、マイルズ氏が夕食の配給を始める旨を伝えた。

サンドイッチとミネラルウォーターだけという簡素な献立ではあるが他に楽しみもなし、食事の時間だけは満ち足りた気分になれる。ただ、肝心の食欲が無かったため、ミネラルウォーターのみの晚餐とし、少し早めに眠りに就くことに決めた。

次に目覚めた時、この状況が少しでもましになっていくことを祈りながら。

外から咆哮が聞こえた。

どうも騒がしい。

覚醒したての私の意識に入り込んできた思考がそれだった。そしてそれは二日前にサンドイッチにピクルスが入っている事への不満の様な穏当なものではなかった。

「もつうんざりだ」山高帽の男であった。

「私を今すぐここから解放してくれマイルズさん」

「いけません、アンブローズさん」マイルズ氏は冷静に反論する。

「私にはあなた方を安全に保護する義務があるのですから」

「その義務とやらのせいで私は娘の誕生日を祝えなかったんだぞ！ 六才のだ！ リヴァプールではぐれて以来

連絡もつかないんだ。第一義務というのなら私にも親として、こんな状況下の彼女を慰めてやる義務がある！」山高帽の男もといアンブローズ氏は帽子をかなぐり捨て、ヒステリックに地団駄を踏みながらそう吠えた。

どうも完全に冷静さを欠いたものらしい。

「そうだ」誰かが呟いた。

「俺がいなくて誰がお袋の面倒をみるんだ？」

「私の彼は？まさかあいつらにやられたなんて……」

「おじさん、いつになったらパパとママに会えるの？」

フラストレーションは皆平等に蓄積されていたものらしい。アンブローズ氏の激昂を皮切りに、群衆は目に見えて浮き足立ち始めた。

「ああ皆さん……どうか落ち着いてください皆さん！ 静粛に！ 静粛に……！」

にわか仕立ての難民キャンプはすっかり混乱の様相を呈していた。もはや誰もマイルズ氏の忠告に耳を貸すものは無く、泣き、怒り、戸惑い、放心し、我を失っていた。

そんな彼らの姿を、レイチェルは皮肉げな笑みを浮かべながら眺めていた。

「おかしいですわね、人間って」私に対して、というよりは殆ど独り言に近い様子だった。

「この世で最も尊い生き物だなんて言う人もいますけれど、どうしてどうして、あつさり他人の意見に流されてしまっなんてハトの群れと大差ありませんわ」彼女の目には最早輝きは無く、声からもハリが失われていた。

銃声と怒号と悲鳴が聞こえる。

見ると、群衆と警備隊が押し合いへし合い、銃を奪い合っている様だった。

どうやら警備隊が群衆を宥めるため威嚇射撃をしたは

いいが、跳弾が誰かに当たり、結果としてこのざまらしい。

「もう私、精も魂も尽き果ててしまいましたわ」

「せめて楽に死にたい」レイチェルはそういうなり躊躇ってしまつた。

レイチェルは今しがた人間をハトの群れと揶揄したが、畢竟、私もその一員のようだ。もうくたびれた。せめて

楽に――。

その時だった、天も裂けよと言わんばかりの轟音と共に天井が崩れ、「やつ」が姿を現したのは。

「やっと来たか」私は人知れず呟いていた。

一際高く咆哮がこだました